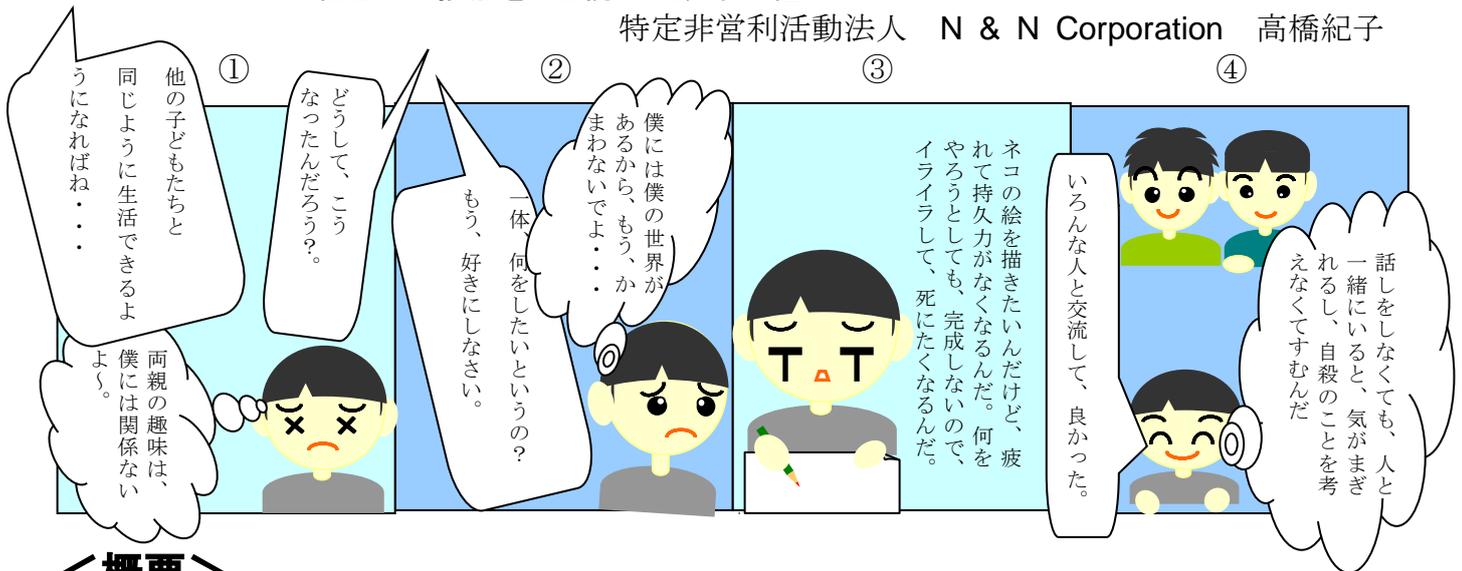


7. 事例6:ネコの絵を描くことが命の支え

～社会との接点を持ち続けて数年が経って～

特定非営利活動法人 N & N Corporation 高橋紀子



<概要>

一般的ではない家庭環境に生を受けて、やがて自らが望むことと周りのズレを感じるようになる。両親の不安と試行錯誤の努力のなか、思春期へと経過していく。病院に対する嫌悪は独身時代にスポーツで怪我をした母親の治療体験への不信感が原因と思われる。独学で作詞の練習なども試みたが、限界を感じて挫折する。唯一、魂の叫びを表現できる絵に「いのち」のエネルギーを燃焼することで、時間と空間の隙間を埋めることができた。社会との接点を持つことで、人とつながることの喜びを体験し始めている。

<この対応はダメだった>

★家族との面談が不十分だった。

→最初の面談で、両親は支援者にまる投げの感じだったが、家族の状態を把握することは支援上必要であることを伝えて、両親との面談を十分に行えたら良かったと思う。

★親子関係について、両親、青年と別個に話し合いをしなかった。

→家族間の信頼関係（相互に何を思い、感じているか）などを知ることによって支援者が親身に支援したいという思いを伝えることができたと思う。

★両親に支援の経過を報告しなかった。

→両親と定期的に面談をして、経過報告やより良い支援について話し合えれば良かったと思う。

<こんな対応が良かった>

☆青年の一番関心のある絵を中心に支援ができた。

☆両親の希望（＝本人の希望）により、面談（社会との接点）という形で交流ができた。

☆青年の関心のあるような話題を幅広く選択して、自由な会話を楽しむことができた

☆家族を専門機関や医療に繋ぐことができなかつたが、定期的に情報は伝えることができた。

☆他の支援団体と連携して（支援者の男性も作詞が出来た）、多面的に支援ができた。

☆心身ともに成熟期（成人）にあるので、家族以外の他者との交流が良い刺激の要素となるような支援となった。

☆支援者たちと友好的な関係を築くことができた。